
能力使い

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
能力使い

【Nコード】
N4187A

【作者名】
サイキアスカ

【あらすじ】
帝や沙良は不思議な力が使えた。人間には無い、不思議な力。そして、能力者たちによる、不思議な戦いが始まろうとしている。

第一章・知らせ（前書き）

不思議な力・不思議な人・戦い。

第一章・知らせ

「・・・また？アンタ、馬鹿じゃないの？」

黄金の腰下まである、長い綺麗な髪。綺麗な顔立ち、小さい背。黄金の眼。

彼女 みせ 三瀬沙良は、無表情で言う。

「黙れ。大体、オマエにだけは言われたかねえ」

「それもそうね」

沙良と話している少年 あずまがわてい 東川帝は、沙良にも負けない無表情で話す。

茶色い髪に、やはり小さい背。

帝の手の中には、銃が握られている。

黒く、赤い水滴が付いている。

だが、弾は入っていない。必要ないのだ。

二人は能力が使えた。チカラ

帝・炎。沙良・雷。

そのため二人は、人とはかかわらない。絶対に。

あるとしたら、プリントなどの学校生活のことだけだ。

帝は、能力を固め、弾代わりに入れ、弾丸代わりに使っている。

一方、沙良は帝みたく武器は使わず、直接使っている。

相手を定めたら、眼に力を入れる。そして、その眼の先にある物を壊す。

二人は部活も習い事などもしない。

家にずっとこもっている。

しかし、やはり・・・暇になる。

そのため、人殺しを始めた。

当初はすぐやめようと思っていた。しかし、一回やるにつれ、ハマっていった。

そして、満月の夜、ある公園に来たところを殺る。

しかも思ったよりも、犯人が捕まらないらしく、警察は苦難してい

る。

そのニュースをみて、帝たちはスリルを味わう。
もう、それは日課であった。

「ねえ、帝。今日、どうするの?」

「は?どうするって・・・今日、満月じゃねーじゃん」

「だからよ。馬鹿」

沙良はそう言っと、さっさと家に帰ってしまった。
なんなんだ?

帝はそう思いながら、やはりさっさと帰ってしまった。

その帰り道、帝はあることに気づいた。

そして、帝は自分の腕時計の日にちを見る。

「・・・明日・・・3月4日・・・アイツの・・・誕生日だっけ」

帝はそう思った。そうだ。思い出した。アイツ、明日誕生日だった。

沙良とは、同じ高級マンションの住民だった。しかも隣同士。

「・・・・・・・・・・」

帝は無言で、町へ向かった。

「?」

沙良は自分のポストに入っている手紙を見つけた。
中を開けてみる。

「・・・・・・・・っ!?!」

沙良は言葉を失った。

「帝・・・・・・・・っ!」

沙良は慌てて、帝の名前を呼んだ。

能力使いの、沙良さんへ。

しっています?

戦いのこと。

もう始まっていること。

こうか書かれていた。

第一章・知らせ（後書き）

知らせは何のためにあるのだろう。

戦いの始まり（前書き）

あらすじ

沙良の下に、知らせが来た。

戦いの始まりの知らせが。一方、帝は町に向かっていた。

戦いの始まり

帝は町にいた。

そして、悩んでいた。

「アイツの趣味・・・よくわからねえ」

だが、しばらく考えて思いついた。

過去に、沙良の好きなものを聞いた覚えがあった。

そのときは

アクセサリー・・・。

と言っていた。

「やっぱ、女なんだな・・・」

帝はそう言った。今ここに沙良がいたらぶっ飛ばれそうだったが。そして、近くの店に入って行った。

ガ　と自動ドアが開く。「いらっしやいませ」と明るい声が店内に響く。

「あ・・・」

帝は、店内を一度見渡した。

端から端まで所狭しと、物が並んでいる。

「ん」

帝の目に何かが映った。

近づいて確かめてみる。

「・・・」

それは、綺麗な曲線を描いた雫の形で、透き通った青色のネックレスであった。

「へえ・・・すげーじゃん」

「お客様。こちら最後の一品となっております。どうしますか？」

店員がいつの間にか来て、問いかける。

「あ・・・」

帝は値段を見た。お手ごろとはいえないが、高いともいえない。まあ、普通だろ。

「じゃ・・・買う」

「ありがとうございます。代金は五千円です」

帝は、かばんから財布を取り出した。

そして中から、五千円を取り出す。それを店員に渡す。

店員はそれを受け取った。店員はラッピングをどうするかなどと聞いてきた。

一応、プレゼント用にしてもらった。

帝は外に出た。

その瞬間。

しゅるるるるるるっ

何か凄まじい速さのものが、目の前をよぎった。

「・・・つつ!?!」

帝はすばやく、身構えをする。

ガゴッ、と何かが後ろで倒れた。

それは看板が真っ二つになっていて、その一つが落下した。

そして、その近くに青々しい葉が落ちていた。

「葉・・・?」

帝はその葉を取る。

「・・・」

そしてすぐに・・・逃げた。

いや、逃げたわけでは無い。人のいないところに行った。

その後ろでなにやら、黒い影が動いていた。

はあはあはあはあはあはあ。

息が苦しくなってきた。

何でここは、こんなに店の列が長いんだ!?

帝はさつきから、二キロは走っている。

なのに、まだ続く。

「あれ？」

帝の足が止まった。

ここはさつきも通ったような・・・。

「やっとか」

どこからか声がした。

その正体は、緑色の髪をした少年であつた。

手には刀を持っている。

「なんだ！？オマエは」

「ん？知らないのかい？だったら教えてやるよ」

少年は帝の前に下りてきた。

「戦いが始まるってことを。いまから初戦が始まるって事を」

帝は軽く身震いをした。

そして、その場所で戦いが起こった。

戦いの始まり（後書き）

緑の髪少年は一体何者！？これからヨロシク！

緑の髪少年（前書き）

たたたたたつ！沙良は帝のもとへ走って行く。

緑の髪少年

少年が目の前に降りてきた。

少年は、にっ、と笑ってから、眼を細めた。

ヒュッ ヒュッ ヒュッ ヒュッ ヒュッ
ヒュッ ヒュッ ヒュッ ヒュッ
ヒュッ！

その刹那の時間に、刃のような葉が飛んできた、帝はぎりぎりだけで

帝は小さく口を動かした。

その瞬間、帝の手には銃が現れた。

そして、まだまだ飛んでくる葉を火の弾で打ち落としていく。

しかし、あっちもあっちでまだまだ飛ばしてくる。

帝も打ち落とすのも大変であつた。

だが、少年が動いた。

「!？」

思ったよりも少年の動きは早く、しかも正確であった。

飛んでくる弾をさらりとよけ、それでもなお、葉を飛ばしてくる。

「つ！？」

葉の一枚が、帝の頬に小さい傷をつけた。

ほんの小さい傷だったが、かなり痛む。

相手が、傷を付けたことで油断した一瞬。

帝は弾を放った。

それは見事に、緑の髪の少年に命中した。

「チイツ！」

少年は、舌打ちをした。

「……おい、オマエは誰だ！」

帝は、少年にそう聞いた。

少年は、にいつ、と笑った。そして言った。

「ボクは、草木明啓。草・木の能力者さ」
くさきめいけい

「明啓？」

「そうさ、まあ続きをやるうじゃないか」

そう言うと、明啓はまた、葉を飛ばしてきた。

ババババババババババババババババツ！！

帝は弾を恐るべきスピードでしかも連続で出した。

明啓は数え切れないほどの、葉を飛ばしてきた。

帝は先行を取らない限り、明啓には手が出せない状態でした。

が、後ろから　ゴゴゴゴゴゴツ　と大きな音がした。

「え・・・？」

後ろには、大きな大木が帝に向かって落下しようとしていた。

そして、今、明啓が操るのをやめた。

そのとたん、今まで操られていた大木は、紐が切れたように一撲に落下した。

「わあああああああああつ！！？」

帝は叫んだ。その刹那。

バババババババババババババババババツ！！

大木が一瞬のうちに粉々になった。

「沙良！？？」

「帝！！」

沙良は帝の元まで走ってきた。

「沙良！？どうしてここに！？」

「帝こそ！なんでここに？探したんだから」

沙良は、安堵のため息を漏らすと、明啓に向かって言った。

「草木明啓　草・木の能力者ね」

「へええっ・・・知ってるんだ」

「当たり前よ」

「そっちの子は、知らなかったみたいけど」

沙良は「そっちの子」というのが、帝だと知って帝を少し睨む。さすがにこれには言い返せません。はい、すみません。

帝は心の中で沙良にあやまる。

「また中断しちゃったね。ということで、またまた始めようか」

明啓は少し困りながらも言った。

二人は身構えをする。

今度は、葉ではなく大木の波であった。

これこそ自然破壊だ。

帝はそう思いながらも、大木を壊していく。

沙良も一揆に何本と、力を発揮していく。

しかし、明啓は攻撃を止めない。

そして、明啓はまた、速攻攻撃に出た。

今度は、さっきより速い。

ついでに、大木の波というおまけ付で。

明啓は帝の真後ろにすばやく回る。

それを、沙良が電撃で攻撃する。

明啓はそれを軽く交わす。

電撃が後ろの電柱に当たり、電柱が折れる。

「・・・やりすぎじゃねーか？」

「・・・そうでもないわ。戦いが終われば、すべてが元に戻る・・・はずよ」

「はず？なんか危険」

二人は会話を終わらせ、また明啓のほうを見る。

明啓は二人の一瞬について、また走り出した。

不意を突かれた二人は、数メートル弾き飛ばされた。

「わあっ！」

「きゃっ！」

どんっ、と壁にぶつかり、二人はへたりこんだ。

明啓はにつ、と笑って二人に大木の波を放った。

よけられない！？

帝はそう思った。だが、

ガガガガガガガガガガガガガガガガアアンンツツ

突然凄まじい音が、空からした。

「・・・・・・・・・・？」

帝は空を見る。すると、空がありえんばかりに曇っていて、コロコロと光っている。

「なっ・・・・・・・・・・？」

横を見ると、沙良が薄っすらと笑っている。

「さ・・・沙良？」

「なに？」

沙良はいつもと変わらない様子で、返事をする。

「これは？」

「稲妻。あたしの技」

「へえ~~~~~・・・じゃなくて、オマエんな力持ってたか？」

「まあ、いろいろあるのよ。あとで説明する」

「・・・・・・・・・・」

おれダメじゃん。

こんな力もってねえ・・・。

一体、どうなつてんだ？

明啓は、「なんだ？」という風に驚いている。

「じゃあ、行くよ・・・耳。抑えておいたほうがいいよ」

言われるままに耳を抑える。

「・・・稲妻・落ちろ」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンンツツ

やはり、凄まじい音がし、稲妻が明啓の上に落ちた。

「わああああああああああああああああっ！！！」

明啓は叫び、ゆっくり倒れていった。

「勝負・アリね」

沙良はゆっくり立ち上がる。

そのとき、沙良の手に何かがはまっていることに気づいた。

指輪。

帝は誰かからのプレゼントか？と思った。

じゃあ、おれあげる必要ないか。

ラッキー

「・・・・・・・・・・・・・・・・ムナシイ。

まあ、いつか。

「これね、「ストーン」で、いうんだって。手紙に書いてあった」

突然、沙良が言った。

「手紙？だれからの？」

「カミサマ」

「・・・・・・・・はい？」

「だから、カミサマ」

カミサマってなんだよ。

ぜったい、嘘だろ。

っーか、信じるなよ！

帝は、心の中でツツコミを入れてみた。

「なんか名前の欄にそう書いてあった。はい、アンタのも」

「？どーも」

帝は沙良から、手紙を受け取った。

確かに名前の欄に「カミサマ」と書いてあった。

マジかよ。

まあいいや。とにかく開けてみよう。

帝は手紙を開けた。中には、手紙と指輪が入っていた。

能力使いの帝君へ。
知ってます？戦いのこと。
もう始まってること。

ちなみに、同封したのは、「ストーン」という、まあ・
力を上げるものです。
ぜひ使ってください。

カミサマより。

なるほど、簡単だけど説明ありがとう。
そして、またなるほど。

沙良のさっきの技は、これでか。

「う・・・ボクを忘れないでくれ・・・」
どこからか、うめき声でした。

『あっ』

二人の声はハモって、明啓のほうを見た。

『ごめん忘れてた』

また、ハモった。

やっぱし、沙良がいたほうが、いいかもな。
便利だし。

翌日。

「・・・ありがとう」

「どういたしまして」

帝は、無事、沙良にプレゼントが渡せたとき。

緑の髪少年（後書き）

こんにちわ。多分、初コメントです。これからもよろしくお願いします！なにぶん、卒業式が近く、時間がないんです。（練習で）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4187a/>

能力使い

2010年10月28日07時37分発行